The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 : 第11号の発刊に寄せて
Author(s)	湯川, 笑子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2015, 11, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言
第11号の発刊に寄せて

『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第11号をお届けします。

2014年度のMHB研究会研究大会は、2014年8月7日にICU教育研究所のご後援のもと、国際基督教大学で開催いたしました。「マルチリテラシーの育成」を大会テーマに、国内外の複数言語の、主として子どもが読み書きを含むマルチリンガル能力を身につけられるような教育を目指して、その方法、理論、研究方法を探ろうと、会員が参集いたしました。大会に先んじて、8/5、8/6には、プレセッションや4つの部会の集まりが企画され、文字通り、熱い3日間となりました。

この大会では、子どもの発達に関するご研究の第一人者でいらっしゃる内田伸子先生に、「考える力を育てることばの教育―メタ認知を活かした授業デザイン―」と題して基調講演をしていただきました。本紀要には、その講演録をご寄稿いただくことができました。数多くの実証研究結果の裏付けをもとに、子どもの認知発達、言語発達、環境との関係を解き明かし、問題を整理・提示した上で、そこにとどまらずに、日本の子どもに必要な論理性の育成のために、実際に小学生にメタ認知活動を取り入れた授業を実践された内容と成果をお示し下さいました。言語と、それに絡み合って発達する認知・情意面での能力を理解する上で、非常に豊富な知見を講演録として収録できることは、MHB研究会にとって大変ありがたいことです。内田先生にこの場を借りて再度お礼申し上げます。

本紀要には、子どものマルチリンガル能力をテーマにした研究論文を1本掲載いたしました。穆紅氏による「言語少数派の子どもの言語活動の展開様相―言語・言語活動・人間活動の一体化の視点から―」です。言語発達や言語習得を、学び手の脳内で起こる認知活動であるととらえる見方に対して、昨今、言語が今まで言語教育者がとらえてきたよりも、もっと社会文化的なもので、言語は他者とのインタラクションの中で相互に影響を与えながら構築的に獲得していくものであるという視点があちこちで語られるようになってきました。本研究論文は、「言語生態学」という概念を土台にし、学習者の社会的ネットワークが言語使用や言語習得に及ぼす影響を正面からとらえた大変貴重な論考です。

2014年度には、長らく開催することがかなわなかった読書会を再開いたしました。2015年度の大会テーマとなるtranslanguagingを前年度から学習して

おこうという企画での読書会でした。この概念に含まれる特殊な用語や概念などの多くが、日本にまだ紹介されておらず、したがって日本語の訳語が存在せず、力の要る読書会でしたが、本紀要には、その学習と議論の成果を書評としてまとめ、掲載することができました。このテーマにご関心のある方は、ぜひご参照下さい。

巻末には、例年通り、活動報告、4つのSIG（部会）情報、入会規定、紀要第12号への投稿規定などの情報も記載しております。MHBウェブページ情報と合わせてご利用下さい。紀要11号の発刊に際し、ご投稿下さった方、査読、編集に多大な労力をささげて下さった方、その他関係者の皆様に感謝いたします。

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会 会長
湯川笑子
2015年3月